

第1章 外国人児童生徒等の受入れにあたって



学校やクラスを、互いに違いを認め合い

共に成長できる場にしよう！

外国人児童生徒等を初めて受け入れる時、「コミュニケーションがうまくとれるだろうか」「この学校に馴染めるだろうか」などの心配から、「大変だ」などとマイナスにとらえてしまう場合もあるようです。しかし、入学・転編入学してくる外国人児童生徒等とその家族の不安はそれよりもはるかに大きいものと考えられます。言うまでもなく、日本を含めいずれの国においても全ての子どもたちが、その地域や学校にしっかりと受け入れられ、学ぶことのできる環境を保障する必要があります。

また、様々な文化的背景をもつ外国人児童生徒等との出会いは、教職員はもちろん、在籍している児童生徒にとっても多様な価値観や文化を知り、ものの見方や考え方を広げ、成長できる大きなチャンスだと捉えることが大切です。

こうしたとき教職員にとって何より大切なことは、外国人児童生徒等がどんな気持ちで学校に登校してくるのだろうかという、子どもの思いに「寄り添う姿勢」です。

目の前にいる子どもを「日本語ができない子ども」として捉えるのか、あるいは「2つ以上の言語を持つ、可能性のある子ども」として捉えるのかによって、その子どもの将来は大きく変わるともいわれています。外国人児童生徒等が健やかに成長できるように、まずは子どもの思いを受け止めながら、一人一人の個性や特性に応じた適切な支援や指導を行いましょよう。

互いの違いを認め合い、その良さに気づき、共に助け合いながら生きていこうとする学校環境は、全ての子どもたちが豊かに成長していくことのできる場となります。

受入れにあたり大切にしたいこと

- 1 外国人児童生徒等に**寄り添う姿勢**で接する
- 2 外国人児童生徒等の**背景や気持ち**を理解しようと努力する
- 3 学校やクラスが外国人児童生徒等にとっても**居心地のよい場**にする
- 4 外国人児童生徒等が**学びやすい環境**をつくる
- 5 外国人児童生徒等の**ライフコース**を見据えて、**学びの連続性**を大切にする
- 6 **多様性を尊重する学校教育へ転換**を図るために**教育環境**を見直す

居心地のよい、楽しい学校に！

来日直後、外国人児童生徒等の多くは、自分の母語や母文化とは異なる環境で学ぶ

ことになるため、今までできていたことができなくなり、それにストレスを感じたり、自信を失ったりすることがあります。また、習慣や文化、考え方の違いから、戸惑ったり抵抗感を覚えたりすることもあります。

そのような外国人児童生徒等にとって、学校が、「居心地がよい、楽しいところ」になるのか、「息苦しくて行きづらいところ」になるのかは、教職員の「寄り添う姿勢」と「環境づくり」にかかっているといえます。

まずは、不安な思いや疑問に思っていることを聴くことから始めましょう。そして、「できなくても大丈夫だよ」というメッセージを発信することも必要です。すぐに学校のきまり等を強要するのではなく、「待つこと」も大切な支援の一つとなります。

兵庫県教育委員会「外国人児童生徒にかかわる教育指針」

平成 12（2000）年

外国人児童生徒の自己実現を支援するとともに、すべての児童生徒が互いの「違い」を「違い」として認め合い、多様な価値観を受容しながら共に生きようとする意欲や態度をはぐくむ、子ども多文化共生教育を推進する。

【基本的な考え方】

【1】

外国人児童生徒が民族的自覚と誇りを持ち、自己実現を図ることができるよう支援する。

【2】

すべての児童生徒に、外国人に対する偏見や差別の不当性についての認識を深めさせるとともに、あらゆる偏見や差別をなくしていこうとする意欲や態度を身に付けさせる。

【3】

共生の心を育成することを目指し、すべての児童生徒に多様な文化を持った人々と共に生きていくための資質や技能を身に付けさせる。

【4】

外国人児童生徒にかかわる教育の充実に向け、教職員一人一人が人権意識の高揚に努めるとともに、実践的指導力の向上を図るための研修体制を確立する。